

海猫

2004(平成16)年11月21日鑑賞(道頓堀東映)



監督=森田芳光/出演=伊東美咲/仲村トオル/佐藤浩市/ミムラ/蒼井優/深水元基/三田佳子/小島聖/白石加代子(東映配給/2004年日本映画/129分)

……森田芳光監督が狙う舞台設定はすばらしく、伊東美咲の演技もグッド。しかし仲村トオル演じる弟の人物像は不明確で、「禁断の恋」の必然性は全然見えてこない。だから、「俺はいやだよ。兄貴があんたを抱いた」というセリフの身勝手さが浮かび上がってくるだけ……。兄弟対決の中、ヒロインが2人の子供を残して崖に飛び込んでいくストーリーも、そのシーンは『タイタニック』(97年)の2人を連想させるものだが、あまりにも不自然。人物像の掘り下げが薄い原作や脚本(?)では、ちょっとカッコいい感覚的なセリフを散りばめても、所詮いい映画を作るのはムリということか……?

祖母、母、娘3代の大河ドラマ

この映画のプロローグとなるのは、成人した長女野田美輝(ミムラ)が婚約者からウソつきだと罵られて婚約を解消されるシーン。ショックのあまり口がきけなくなった美輝に対して、死んだ母親薫の生きざまを祖母の野田タミ(三田佳子)が語っていくという構成をとっている。

したがってこの映画は、ある意味では祖母・母・娘3代の女たちの大河ドラマともいえるもの。

ベテランの三田佳子はさすがに貫禄を見せ、ゆったりとしたしゃべりの中に秘めた説得力は十分。

次男広次の人物像に不満あり!!

この映画は、兄の邦一(佐藤浩市)の嫁薫(伊東美咲)と邦一の弟広次(仲村

トオル)との禁断の恋がテーマ。したがって、この映画の決めゼリフ(?)は、広次の「俺はいやだよ。兄貴があんたを抱いた」と、薫の「一度だけ、あなたに抱かれにきました」だが、このゼリフを際立たせるためにストーリーの設定をし、またそのための人物像の設定をしているという感じが強く、私にはこれが大いに不満。

広次を演ずる仲村トオルは、パンフレットの中で「僕が思う広次は、どこか屈折したロマンチスト」と表現し、さらに「舟も家も海も人間関係まで……何もかも兄貴が譲り受ける。そのことに対し深層心理では『ひとつくらいは俺に出来ないかな』、もしくは『ひとつくらい奪い取ってやりたい』と思っていたかもしれない」と述べているが、これってかなりヘン!

こんな人物を、「屈折したロマンチスト」とカッコいい評価(?)をすべきではないと私は思うのだが……。

邦一と薫との結婚は誰に押しつけられたものでもなく、恋愛結婚に近いもの。その兄嫁に対して、「俺はいやだよ。兄貴があんたを抱いた」というゼリフは、そりゃないだろう……。

邦一のどこが悪い!

この映画では、長男の邦一は次男の広次に比べてかなり悪役気味(?)に描かれているが、それは薫と広次との禁断の恋を美化するためのもので、きわめて不当……?

第1に、薫との結婚や家庭生活において邦一はたしかに亭主関白気味だが、特に不自然とか横暴なことはなく、むしろ海の男らしく堂々と生きている魅力的な男。2人がピッタリの相性でないことは初夜の様子からうかがわれるものの、夫婦の間に多少のズレや不満があるのはむしろ当然。それくらいはがまんしなければ……。

第2に、漁師の家を邦一が継いだのは、広次が漁師はイヤだと言って家を出て工場勤めをしているからであり、何も長男の邦一がすべてを独占してしまったわけではない。したがって、兄貴が独占しているのが気に入らないという深層心理のもとに広次が兄嫁を奪おうと思ったとすれば、それは、筋違いもはなはだしい

と言うべきもの。

第3に、広次は薫の出産時に邦一が立ち会わなかったと言ってさかんに邦一を責めるが、その時邦一は、漁師たちのリーダーとして対立する隣村の漁師たちとの一大決戦(?)に臨んでいたのだから、そりゃ仕方がない。

むしろ、兄嫁の出産を隣の部屋で弟がじっと見ながら待っている方がおかしいのでは……?

隣村の漁師たちとの決戦(?)で足を負傷したため入院した病院で、看護婦の啓子(小島聖)と仲良くなり、お互いが惹かれていったのは明らかに薫に対する浮気・不倫だから、これについては邦一が悪いことははっきりしているが、それは世の中によくあること……?

そして邦一にとっては薫よりもこの啓子の方が相性がよかったことも事実のよう。

しかしそれだけで、この映画のような悲劇的な結末に結びつけるのは無理がある。またネタばらしにならない程度で言えば、昔の物語が語り終えられた後、邦一が自分を訪ねてきた長女美輝(ミムラ)に対してとった行動は立派なもの。漁師の家に長男として生まれた邦一が、この映画の中ではかなりワル者風に描かれているのは私には全く納得いかないが……? そしてそれは、邦一の母親であるみさ子(白石加代子)についても同様。

大抜擢の伊東美咲はステキ、しかし最後は……?

この映画の主人公薫は、ロシア人の血をひく、透き通るような白い肌と海猫のような美しい目をもった女性。そして伊東美咲は映画初主演ながらそんなイメージにぴったりの美形。控え目で弱々しそうだが芯のしっかりした女性像を見事に演じているし、意外に(?)多いセックスシーンでも大胆にその美しい肢体を見せてくれている。

こんな薫が、「俺はいやだよ。兄貴があんたを抱いた」と言って家を出てしまった広次に会うために、邦一に対して「久しぶりに実家に戻ってきます」とはっきり嘘をつき、広次の家で「一度だけ、あなたに抱かれに来ました」と告白するセリフが不自然なことは前述のとおりだが、もっと不自然なのは回顧物語のラス

トシーン。

その「兄弟対決」での広次のセリフは、「あんたは海を守ってくれ。薫は俺が守っていく」というものだが、まずそりゃおかしいヨ！

それに比べるとむしろ、包丁を自分に突きつけながら、「オレを殺してから、連れて行け！」と叫ぶ邦一のセリフの方が説得力があるというものだ。

こんなギリギリの切羽つまった兄弟対決の中、「もうやめて！」と叫びながら車から飛び出した薫は1人崖から身を投げ、さらには広次もこれに続いて……。これは最後のハイライトシーンかもしれないがこりゃあまりに不自然では……。だって、2人の子どもを連れて嫁ぎ先から逃げようとしていた薫が、子供を残したまま1人崖から飛び込み自殺することなど絶対ありえないと私は思うから……。

こんなあまりにも作為的なストーリーづくり、セリフづくりには、私は全然納得できないが……。

腹が立つ薫の弟、孝志のバカさ加減！

前述のように邦一の、無骨だが海の男として一本筋の通った生き方と対比して、私は弟広次の軟弱さ(?)に腹が立つが、それ以上に腹が立つのが薫の弟孝志のバカさ加減！

もちろん孝志は悪い人間ではないが、定職につかず、いつも母親から小遣いをせびってブラブラしている様子。こんな孝志が邦一よりも広次と相性がいいのは当然。

孝志が姉薫の嫁ぎ先を訪問し、しばらく昆布干しの手伝いをしながら世話になるシーンがあるが、そこで見せる孝志の態度は生意気で失礼そのもの。

「郷に入れば郷に従え」のことわざどおり、漁師には漁師の生活のりズムがあるのは当然。

ところが、1人だけ朝遅く起きてきて、邦一から「働かざるもの食うべからず」と言われて反発するばかりか、「バイト代を払え！」とか「これっぽっちでは、一度女と遊んだらなくなってしまう！」とほざくのを知っていると、思わず「お前はバカか！」と言いたくなってしまう。そして、こんなバカ弟を必死で止めようとする薫がかわいそう……。

もっとも、この孝志が薫からのSOS信号(?)ともとれる手紙を受け取った後の行動はきわめて適切。これは形式的には自分に対する手紙だが、本当は広次にあてた救助要請だと、こんなことだけはよく頭が回るのが孝志の性格の特徴。そして、急いで車に乗って邦一の家を駆けつけたところで、大悲劇が待ち受けることになるのだが……。

次女野田美哉の父親は誰？

薫が広次の家を訪れ、一夜限りの契りを結ぶのがこの映画のハイライトシーン。その結果(?), 邦一と薫夫婦の間に次女美哉が誕生したらしいことは、今は完全に邦一の愛人となっている看護婦の啓子から、「薫が函館の病院に来ていた」という情報を伝えるシーンによってぼんやりと観客にわかるように作られている。

美哉の成長した姿を演ずるのは、『花とアリス』(04年)でみずみずしい演技を見せた蒼井優。この映画ではチョイ役だが、最後にはこの美哉にも自分自身の出生の秘密が明らかに……。そこで美哉は「HIROTSUGU AKAGI」と「KAORU AKAGI」と並んで刻まれたお墓の前で涙することになるのだが、本当に美哉の父親は広次なのか？

「嫡出性の推定」の理解は？

前述のように、映画のストーリー展開上は美哉は広次と薫との一夜限りの契りから生まれた娘であることがボンヤリとわかるようにされているが、弁護士の私から見れば、それは法的に非常におかしいもの。

つまり、「嫡出性の推定」を定めた民法第772条第1項は「妻が婚姻中に懐胎した子は、夫の子と推定する」と定めている。

したがって妻が婚姻中に懐胎した子(推定される嫡出子)ではあるが、夫の子ではない場合には、夫は否認権を行使し、その方法として嫡出否認の訴えを提起(第774条以下)しなければ、夫の子であるという推定を覆すことができない、というのが法的構成なのだ。

ところがこの映画では、美哉の本当の父親である(?)広次は薫と一緒に死んでしまっているうえ、邦一がこの「嫡出否認の訴え」を提起したとは到底考えら

れない。したがって戸籍上、美哉はあくまで邦一と薫との間の嫡出子だし、法的にも美哉の父親は邦一以外にありえないもの。

このように、何らかの法的手続において血液鑑定やDNA鑑定をやったわけでもないのに、なぜ美哉の父親が広次とされたのかについて、この映画のストーリーはあまりにも曖昧で、いい加減と言わざるをえない。

さらに言えば、「赤木家」先祖代々の墓に広次と薫が入っているのならまだわかるものの、広次と薫の2人が並んでネーミング(?)されたお墓なんてあるはずがないと思うのだが……。

美しい北海道の舞台には大満足

パンフレットでは、森田芳光監督は「日本の風土、四季を存分に生かした中で展開される人間ドラマ」を重視したと書かれているが、この映画の舞台となる北海道の函館のまちや、函館から峠を隔てた反対側に位置し、邦一たちが昆布漁を生業としている南茅部^{かやべ}のまちは美しい。

またこの映画のタイトルとなった海猫の飛び交うシーンが随所に配置されており、森田監督の狙いはバッチリ。観客はきっと、この美しさに魅了されることだろう。

なお、つい先日昭和の大スター石原裕次郎を描いた、兄石原慎太郎の小説『弟』がテレビドラマ化され5日間にわたって放送されたが、この石原裕次郎たちが生まれた北海道の小樽のまちなもステキなところ。北海道にまだ一度も行ったことがない私としては、是非一度行ってみたいものだ。

2004(平成16)年11月22日記